

〔和漢三才圖會八十卷〕榕音容 ○

按此木不載葉花實之形故不知有於本朝否也蓋莊子所言不才木則樗栲也栲之類見于前

〔草木育種後編下〕卉盆玩井に服器に用あるもの榕音容樹音容木音容 俗にあ。こ。方。言。枕。香。木。江。戸。と。も

いふ和蘭にてインデヤンスへ一ケボーム又ウラルトルボーム薩州より來る大樹なれど江戸にては盆玩にするのみ夏より秋まで莖幹へ三度計り實を生ず形ち天仙果ひめいちじやくに似たり夏の初よ

り暑中迄に枝を管にきり挿してよし中のひなたにてよし葉を生じかたまりて糞汁を澆ぐべし冬は窖に入てよし一種琉球にてかすまるといふものあり葉女貞ちに似て光澤あり實葉の間

結ぶ事あこうに異なりとす暖國にて枝間より根を下垂し又幹となるといふ冬日暖窖に入てよし暑月枝を管にきり挿して活す魚腥水豆肥糞水度々澆ぎて生長し易し薩州大しまより來

る砂糖の樽に此材あり用て器に製して頗る雅なり二種皆花なくして實を結ぶ無花果の一種なり

喜住部 ○ 阿 按に榕樹即佛家にいふ菩提樹にして一名貝多羅なり慈恩傳云菩提樹即畢鉢羅樹也法顯傳曰貝多樹下是過去當來諸佛成道處華嚴探玄記曰畢鉢羅樹此曰榕樹在嶺南亦有此

類又菩薩樹といふ八紘譯史曰菩薩樹不花而實人不可食其枝下垂附地生根若柱歲久結成巨材人蔭其下無異屋宇至有容千人者以為佛宇又多羅樹あり即椰子の類にて葉を寫經の料に

充るもの也又貝多羅花ありて讀脩臺灣府志に見ゆとも別物也予本艸講義に譯す故にこ

こに略す

〔紀伊續風土記 物産六下〕榕音容樹音容木音容 一名倒生木通雅 數音容十音容丈音容 周圍數抱音容 冬月葉枯音容 三月頃新葉生音容 舊葉脫音容 形冬青葉に似て潤く音容 天仙果葉に似て厚く音容 紋脈異なり音容 七月の頃花なくして音容 無花果

の如く木幹及孫枝處を定めずして實結ぶ形も亦無花果の如くにして音容 小く初青く熟して赤し土人採りて食用とす方言ヤウノミと垂して又次の枝に著き此の上より長細根下垂して次の條に著き其著たる枝より又長細根下垂して又次の枝に著き此の上より長細根下垂して